

よだかの星

宮沢

賢治

よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌みそをつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

足は、まるでよぼよぼで、一いっけん間けんも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまつという上くあい合あでした。

たとえば、ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずつと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあつくと、さもさまいやそつと、しんねりと目をつぶりながら、首をそつ方ほうへ向けるのです。もっとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまっとうから悪口をしました。

「へん。又また出て来たね。まあ、あのさまをいらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよじだよ。」

「ね、まあ、あのくちのおおきごとよ。きつと、かえるの親類が何かなんだよ。こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生なまはんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをぢぢめて、木の葉のかけにでもかくれたでしょう。ところがよだかは、ほんとうは鷹たかの兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂はちすずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜みつをたべ、かわせみはお魚を食べ、よだかは羽虫をとって食べるのです。それによだかには、するどい爪つめもするどいくちばしもありますでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はずはなかつたのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗むやみに強くて、風を切って翔かけるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきこえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為ためです。もちろん、鷹は、これをひじょうに気にかけて、いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩かたをいからせて、早く名前をあらためる、名前をあらためると、いづのでした。

ある夕方、とうとう、鷹がよだかのうちへやって参りました。

「おい。居るかい。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥知らずだな。お前とおれでは、よっぽど人格がちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまででも飛んで行く。おまえは、曇ってうすべらい日か、夜でなくちゃ、出て来ない。それから、おれのくちはしゃ爪を見る。そして、よくお前のとくらべて見るがいい。」

「鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたものではありません。神さまから下さったのです。」

「いいや。おれの名なら、神さまから貰ったのだと云ってもよからうが、お前は、云わば、おれと夜と、両方から借りてあるんだ。さあ返せ。」

「鷹さん。それは無理です。」

「無理じゃない。おれがいい名を教えてやろう。市蔵といつんだ。市蔵とない名だろう。そこで、名前を変えるには、改名の披露というものをしないとけない。いいか。それはな、首入市蔵と書いたふだをぶらさけて、私は以来市蔵と申しますと、口上を云って、みんなの所をおじまきしてまわるのだ。」

「そんなことはとても出来ません。」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝まで、お前がそうしなかった

ら、もうすぐ、つかみ殺すぞ。つかみ殺してしまつから、そう思え。おれはあさつての朝早く、鳥のつちを一軒すつまわって、お前が来たかどうかを聞いてある。一軒でも来なかったという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ。」

「だってそれはあんまり無理じゃありませんか。そんなことをする位なら、私もう死んだ方がましです。今すぐ殺して下さい。」

「まあ、よく、あとで考えてもらえ。市蔵なんてそんなにわるい名じゃないよ。鷹は大きなねを一杯にひろげて、自分の巢の方へ飛んで帰って行きました。

よだかは、じつと目をつぶって考えました。

(一)たい僕は、なぜこつみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたよつで、くちは裂けてるからなあ。それだって、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巢から落ちていたときは、助けて巢へ連れて行ってやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすよつに僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑ったっけ。それにああ、今度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしたなあ。(

あたりは、もううすくらくらくなっていました。よだかは巢から飛び出しました。雲が意地悪く光って、低くたれています。よだかはまるで雲とすれすれになって、

音なくそらを飛びまわりました。

それからにわかによだかはくちを大きくひらいて、はねをまっすぐに張って、まるで矢のようにそらをよこぎりしました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉にはいりました。

からだがつちにつくつかつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は靄色になり、向うの山には山焼けの火がまっ赤です。

よだかが思い切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一疋の甲虫が、よだかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時何だかせながぞつとしたように思いました。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつって、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、又そらへのほりました。

また一疋の甲虫が、よだかの咽喉に、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理に呑みこんでしまいました。だが、その時、急に胸がどきつとして、よだかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐるそらをめぐるのです。

(ああ、甲虫や、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くのそらの向うに行ってしまうおう。)

山焼けの火は、だんだん水のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているようです。

よだかはまっすぐに、弟のかわせみの所へ飛んで行きました。きれいなかわせみも、丁度起きて遠くの山火事を見ていた所でした。そしてよだかの降りて来たのを見て云いました。

「兄さん。今晚は、何か急のご用ですか。」

「いいや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前一寸お前に遣いに来たよ。」

「兄さん。行っちゃいけませんよ。蜂すずめもあんな遠くにいるんですし、僕ひとりぼっちになつてしまつじやありませんか。」

「それはね。ほんも仕方ないのだ。まっ今日は何も云わないで呉ね。そしてお前もね、ほんしてもとらなければならぬ時のほかはいたすらにお魚を取ったりしないようにして呉ね。ね、さよなび。」

「兄さん。どししたんです。まあまっ一寸お待ちなさい。」

「いや、いつまで居てもおんなじだ。蜂すずめへ、あとでよろしく云ってやって呉れ。さよなら。もうあわないよ。さよなら。」

よだかは泣きながら自分のお家へ帰って参りました。みじかい夏の夜はもうあけかかっています。

羊歯の葉は、よあけの霧を吸って、青くつめたくゆれました。よだかは高くきしきしきと鳴きました。そして巣の中をきちんとかたづけ、きれいからだ中のはねや毛をそろえて、また巣から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまが丁度東からのぼりました。よだかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のように、そっちへ飛んで行きました。

「お日さま、お日さま。どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。私のようなみくいくからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでしょう。どうか私を連れてって下さい。」

行っても行っても、お日さまは近くなりませんでした。かえってだんだん小さく遠くなりながらお日さまが云いました。

「お前はよだかだな。なるほど、すいぶんつかう。今度そらを飛んで、星にそつたのんでらん。お前はひるの鳥ではないのだからな。」

よだかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしまいました。そしてまるで夢を見ているようでした。からだはずつつと赤や黄の星のあいだをのぼって行ったり、どこまでも風に飛ばされたり、又鷹が来てからだをつかんだりしたようでした。

つめたいものがにわか顔に落ちました。よだかは眼をひらきました。一本の若いすすきの葉から露がしたたつたのでした。もうすっかり夜になって、そらは青ぐるく、一面の星がまたたいていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまっかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたい星あかりの中を飛びめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切って西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになって、よろよろと落ちて、それからやっとふみとまっつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の大犬座の方へまっすぐに飛び

ながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。」

大犬は青や紫や黄や美しくせわしくまたたきながら云いました。

「馬鹿を云うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえの羽でここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」

そしてまた別の方を向きました。

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それから又二へん飛びめぐりました。それから又思い切って北の大熊星の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてって下さい。」

大熊星はしずかに云いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そう云うときは、氷山の浮いている海の中へ飛び込むか、近くに海がなかったら、氷をつかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ。」

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それから又、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天の川の向う岸の鷺の星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。」

鷺は大風に云いました。

「いいや、とこもとこも、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。又よほど金もいるのだ。」

よだかはもうすっかり力を落してしまって、羽を閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう一尺で地面にその弱い足がつくというとき、よだかは俄かにのろしのようにそらへ飛びあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷺が熊を襲つときするように、ぶるっとからだをゆすって毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシキシと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむっていたほかの鳥は、みんな目をさまして、ぶるぶるぶるえながら、いぶかしそうに星ぞらを見あげました。

よだかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐにそらへのぼって行きました。もう山焼けの火はたはこの吸殻のくらいにしか見えません。よだかのはぼってのぼって行きました。

寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなった為に、羽をそれはそ

れはせわしくうごかさなければなりませんでした。

それなのに、星の大きさは、さっきと少しも変わりません。つくいきはふいこのようです。寒さや霜がまるで剣のようによだかを刺しました。よだかは羽がすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもうへんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただこのころもちやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがっては居ましたが、たしかに少しわらって居りました。

それからしばらくたってよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっっていました。

そしてよだかの星は燃えつつけました。いつまでもいつまでも燃えつつけました。

今でもまだ燃えています。